

【 復活讃詞 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより  
 恵深主 爾 高

くだり、みつかのほうむりをうけて、  
 降 三日 葬 受

われらをくるしみよりときたまえり、  
 我等 苦 釋 給

わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう  
 我 生命 復活 主 光

えいはなんぢにきす。  
 榮 爾 歸

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつもよよに、アミン。  
 何時 世 世

しととひとしくどうぎなるもの、ちゅう  
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい  
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい  
 神 撰 笛 愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう  
 満 器 我 國 光

しよ お しゃ、 あしとしゆきょうせい ニ コ ラ イ  
 照 者 亜使徒主教聖  
 よ、 なんぢの ぼくぐんの た あ め、 および  
 爾 羊 群 爲 及  
 ぜんせ かいの た めに、 いのちを た も う せい  
 全世界 爲 生 命 賜 聖  
 さんしゃに いのり た ま え。  
 三者 祈 給

【 聖三の歌 】

代禱) <sup>しゆ</sup>主よ、<sup>けいけん</sup>敬虔なる<sup>もの</sup>者を<sup>すく</sup>救い、<sup>およ</sup>及び<sup>われら</sup>我等に<sup>き</sup>聆き<sup>たま</sup>給え、

しゆよ、 けいけんなるものをすくい、 およびわれ  
 主 敬 虔 者 救 及 我  
 らにききたまえ。  
 等 聆 給

代禱) <sup>よよ</sup>世世に、

ア ミ ン。

せいなるかみ、 せいなるゆうき、 せいなる  
 聖 神 聖 勇 毅 聖  
 じょうせいのものよ、 われらをあわれめ  
 常 生 者 我 等 憐  
 よ。 せいなるかみ、 せいなるゆうき、 せい  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

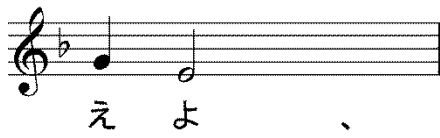
なるじょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ  
 常 生 者 我 等 憐  
 め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、  
 聖 神 聖 勇 毅  
 せい なるじょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐  
 れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せい しん  
 光 榮 父 子 聖 神  
 に き す、 い ま も い つ も よ よ に、 ア ミ ン。  
 歸 今 何 時 世 世  
 せい なるじょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐  
 れ め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う  
 聖 神 聖 勇  
 き、 せい なるじょう せい の も の よ、 わ れ ら を  
 毅 聖 常 生 者 我 等 憐  
 あ わ れ め よ 。  
 憐

【 提綱 (プロキメン) 主日第8調 】

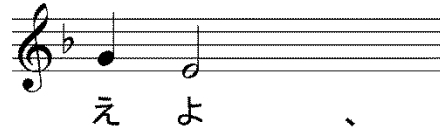
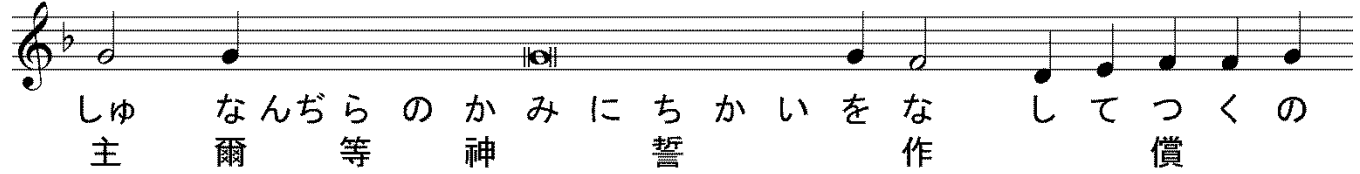
代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) プロキメン、<sup>しゅなんぢら</sup> 主 爾 等<sup>かみ</sup> の 神<sup>ちかい</sup> に 誓<sup>な</sup> を 作<sup>つく</sup> して 償<sup>の</sup> えよ、

しゅ なんぢら の か み に ち かい を な して つく の  
 主 爾 等 神 誓 を 作 して 償



誦經) 神はイウデヤに知られ、其名はイズライリに 大なり、



誦經) 主 爾等の神に



【 使徒經 (アポストロス) 128 端 コリンプ前書 3 章 9 節~17 節 】

代禱) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがコリンプ人に達する前書の讀、

代禱) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、我等は神の同勞者なり、爾等は神の耕えす所の田、神の建つる所の屋

なり。我は神より我に與えられし恩寵に循いて、智なる工師の如く基を置けり、他人

は其上に建つ、然れども各如何に建つるかを慎め。蓋置かれたる基なるイイススハ

リストスの外、誰も他の基を置く能わず。人若し斯の基の上に金、銀、寶石、木、草、

稈を以て建てば、各人の工は顯れん、夫の日は之を表さんとすればなり、蓋火に因り

て明ならん、火は各人の工の如何なるを試みん。若し人の建てし所の工存せば、値

を得ん。若し其工焚けば、損を受けん、然れども己は火より脱るるが如く救われん。爾

等豈知らずや爾等は神の殿にして、神の神爾等の中に居ることを。若し人神の殿を

毀たば、神は彼を毀たん、蓋神の殿は聖なり、此の殿は爾等なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。わたしたちは神の同労者である。あなたがたは神の畑であり、神の建物である。神から賜った恵みによって、わたしは熟練した建築師のように、土台をすえた。そして他の人がその上に家を建てるのである。しかし、どういうふう建てるか、それぞれ気をつけるがよい。なぜなら、すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである。この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、または、わらを用いて建てるならば、それぞれの仕事は、はっきりとわかってくる。すなわち、かの日は火の中に現れて、それを明らかにし、またその火は、それぞれの仕事がどんなものであるかを、ためすであろう。もしある人の建てた仕事そのまま残れば、その人は報酬を受けるが、その仕事が焼けてしまえば、損失を被るであろう。しかし彼自身は、火の中をくぐってきた者のようにではあるが、救われるであろう。あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである。

\*\*\*\*\*

代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第8調 】

アリル イ ヤ、アリル イヤ、  
ア リル イ ヤ。

誦經) <sup>きた しゅ うた かみわ すくい かため よ</sup> 来りて主に歌い、神我が救の防固に呼ばん、

アリル イ ヤ、アリル イヤ、  
ア リル イ ヤ。

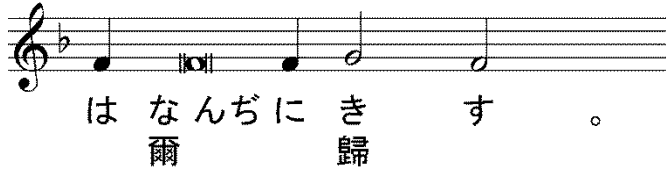
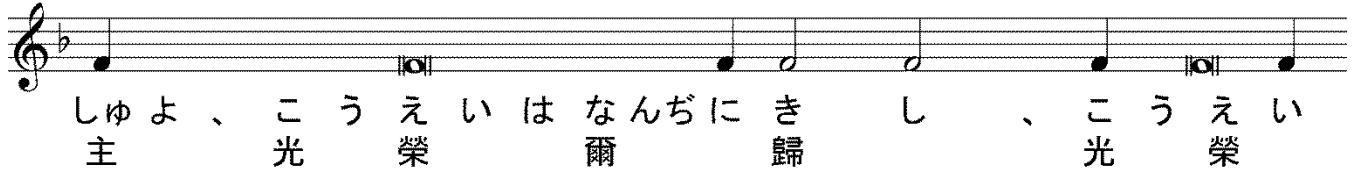
誦經) <sup>さんよう もつ そのかんばせ まえ すす うた もつ かれ よ</sup> 讃揚を以て其顔の前に進み、歌を以て彼に呼ばん、

アリル イ ヤ、アリル イヤ、  
ア リル イ ヤ。



代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup> マトフェイ傳の聖福音經の讀、



代禱) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

誦經) <sup>か と き そのもと うなが ふね のぼ みづか たみ き あいだ</sup> 彼の時イイス イイス其門徒を促して、舟に登らしめ、自ら民を去らしむる間に、

<sup>おのれ さき か きし ゆ たみ さ のち かれ どくしよ おい きとう ため</sup> 己に先だちて、彼の岸に往かしめたり。民を去らしめて後、彼は獨處に於て祈禱せん爲

<sup>やま のぼ すで く ひとりかしこ あ と き ふねうみ なか あ なみ ゆ</sup> に山に登り、既に暮れて、獨彼處に在りき。時に舟海の中に在りて、浪に撼られたり、

<sup>かぜ さか ゆえ よしこう と き うみ ふ かれら ゆ もんとそのうみ ふ み</sup> 風の逆いし故なり。夜四更の時、イイス海を履みて彼等に往けり。門徒其海を履むを見

<sup>おどろ い こ かいぶつ すなわちおそれ よ よ しか ただち かれ</sup> て、驚きて曰えり、是れ怪物なり、乃懼に由りて呼べり。然れどもイイス直に彼

<sup>ら かた い こころ やす こ われ おそ なか かれ こた い しゅ</sup> 等に語りて曰えり、心を安んぜよ、是れ我なり懼るる勿れ。ペトル彼に答えて曰えり、主

<sup>も こ なんぢ われ みづ ふ なんぢ いた めい かれい きた</sup> よ、若し是れ爾ならば、我に水を履みて爾に至らんことを命ぜよ。彼曰えり、來れ、ペ

<sup>ふね くだ みづ ふ もと ゆ しか かぜ はげ み おそ おぼ</sup> トル舟を下り、水を履みて、イイスの許に往けり。然れども風の烈しきを見て、懼れ、溺

<sup>よ い しゅ われ すく ただち て の これ たす いわ</sup> れんとして、呼びて曰えり、主よ、我を救え。イイス直に手を伸べて、之を援けて曰く、

<sup>しょうしん もの なん うたが とも ふね のぼ およ かぜや ふね あ ものつ</sup> 小信の者よ、何ぞ疑いたる。共に舟に登るに追びて、風息みたり。舟に在る者就き

<sup>かれ はい い なんぢ まこと かみ こ すで わた ち きた</sup> て、彼を拜して曰えり、爾は誠に神の子なり。既に濟りて、ゲンニサレトの地に來れり

。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳)

その時、イエスは弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸へ先におやりになった。そして群衆を解散

させてから、祈るためひそかに山へ登られた。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。ところが舟は、もうすでに陸から数丁も離れており、逆風が吹いていたために、波に悩まされていた。イエスは夜明けの四時ごろ、海の上を歩いて彼らの方へ行かれた。弟子たちは、イエスが海の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと言っておじ惑い、恐怖のあまり叫び声をあげた。しかし、イエスはすぐに彼らに声をかけて、「しっかりするのだ、わたしである。恐れることはない」と言われた。するとペテロが答えて言った、「主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください」。イエスは、「おいでなさい」と言われたので、ペテロは舟からおり、水の上を歩いてイエスのところへ行った。しかし、風を見て恐ろしくなり、そしておぼれかけたので、彼は叫んで、「主よ、お助けください」と言った。イエスはすぐに手を伸ばし、彼をつかまえて言われた、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」。ふたりが舟に乗り込むと、風はやんでしまった。舟の中にいた者たちはイエスを拝して、「ほんとうに、あなたは神の子です」と言った。それから、彼らは海を渡ってゲネサレの地に着いた。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。  
 爾 歸 す。

※代式祈祷③ へ